

書制作における臨書と作品形成

森 哲 之

はじめに

書作品には、語句等を題材とし制作する創作作品と、古典等を題材とし制作する臨書作品がある。制作者は、言葉や文字を選定し、作者の思想や感情を表現するとともに、視覚に訴えるよう造形美を創造する。そして、題材に対する感動を書表現していく。書作品の制作にあたっては制作意図と目的を持ち、表現形式や書風を考える。書としての作品形態では書式や表装が関わり、展覧する場を設定する。また、書風形成においては、従来の古典による臨書に加え、昨今では新出文字資料等を対象とした臨書がなされている。それに伴い、制作者個々による制作方法と様々な学書法が見られる。

本稿では、鑑賞を目的とした書作品の制作に関して、書風形成における基本的な方法を考察する。また、学書における臨書の目的や意義とその作品の意義を見出し、書が鑑賞に堪えうる作品として成立するための内容に言及する。

書作品における目的と主張

書作品を制作する際、制作者は他者との相違を明確に示す。実質的に個の創造が果たされているものとは、表現としての自己主張が明確なものであり、客観性を伴うものである。書作品の制作者は、言葉や思想を

書制作における臨書と作品形成

伝達するとともに、文字造形に美を含め視覚的な表現を通じて主張する。それを果たすために、文字の造形美において感動を呼び起こさせるよう書表現に工夫を凝らす。制作者には、作品制作における動機として、作品がどのように生かされるものなのか、その存在価値が問われる。

また、書の作品には、他の芸術とは異なる特有の作品形成が見られ、書体や書風が様々にあり、それらを活用しながら制作を行う。書体や書風を使用するだけでは個性を発揮することには繋がらないが、それを改良発展させていくことには際限がない。そこで、個々の制作者が文字を取り扱うにあたって、書風というものが書作品における主張となる。この書風形成における方法に臨書がある。これは、書の古典等を書くことであり、個々人の書風形成の上で柱となるものである。美を享受し再生させる作業ともいえ、書の歴史の発達、変遷を踏まえた総体的な理解が求められる。

文字は元来人工的に創造されたものである。個々が書く文字には規範性がある。その構造に則り、その上で自由に表現していくこととなる。つまり、書としての構造を認識し、書が作品が制作されるのである。現代では、文字性に拘らず書の部分的な要素を活用し表現する作品も見られるが、客観性を高めるためにも、書の構造を正確に把握する必要がある。

書は、時間的、空間的芸術と考えられる。運筆においては時間的経緯が関わり、形づくられる。運筆における一回性により、いかに自然な律動が備えられるかを考えていく。このことは、音楽的な律動、平面における絵画的な構成内容に近い要素がある。また、書の表現では特に線質が問われる。線質には、制作者の感情が直に反映され、その時々においてまたとない表情となる。運筆における微細な線の変化が、文字の形における大きな特色をもたらしている。これが有機的に関わることにより、文字の結構、字間、行間を決定付ける。書作品の展開において生命感溢

れる表現の要因となっている。

書の作品観と書式

書における作品観には多様な見方がある。書の作品制作において、形状や書式が考えられ、その内容においては、個性を生かした表現、自らの創造に到達することが求められる。書表現は、日常において、言葉の内容以外に視覚的な美の要素が込められた伝達手段である。また、芸術として位置付けられるものが存在する。評価に値する先人の書には、作品として成立させるための必然性が認められる。制作にあたっての動機、書を通じての主張、書である必然、目的が踏まえられ、書表現していく。そこで、先人の作品及び学書法により、制作におけるある程度の方向性を導き出すことができる。

現代に生かされる書作品には、書としての特性を生かし、現代に立脚した視点が盛り込まれる。勿論、伝統的なスタイルを継承することも重要なことであり、制作者の立場に委ねられる。しかしながら、書の発達、変遷を辿ると、時代毎に大きな特色を出している。常に時代に即した新しい手法が考案され、徐々に様式が確立されてきた。出来上がった結果とともに、その過程に意義を見出せる。その過程を考えれば、現代には今に相応しい表現を求めていくことになる。書式は、時代毎に発達し数々の試みがなされてきた。伝統を守りながら、時代に相応しい表現や様式が改良されてきたのである。書の歴史において、制作には自ずと時代性が反映されている。

また、書の作品観も、時代とともに変化してきた。時代の嗜好、流行、作品が備わる環境に応じて、書が生かされる場が異なる。中国明清頃に見られる長条幅の書では、作品を展示する場や目的が書の表現内容を変化させてきた。日本近代頃までは、軸装作品が書の主たる形式である。

現代における書作品では、建築様式などの変化にも伴い、書の作品形態も多様化してきた。このような観点から、現代の書作品を見ると、多様な書式が制作においてなされ、額装し鑑賞されることが多く見られるようになった。このことは、書が美術における作品と同列の鑑賞対象として扱われ、書のあり方に新しい方向性を生み出させている。書作品においても造形美の希求が重視され、表現を発達させている。現代では、書作品としてのあり方そのものに大きな変化が見られ、書の作品を制作するプロセスも目的に応じて多様化した。

臨書における創造

ここで、臨書作品について考えてみると、その対象は、作品として過去の制作者が示したものである。そのままに敷き写し自身の作品として発表することには少なからず抵抗がある。作品発表では、制作者としての目的に確固たる意図がなければならぬ。臨書においてどの程度正確に書写できたかを考えることは、技術力の目安にはなるが、制作者の個人的な意義はあっても作品としての意義は薄いものとなる。

古典、諸資料類を対象とした臨書の場合、原本の形状と現代の書作品の形状とは根本的に異なる。その場合には、制作者も自己の工夫をせざるを得ない。対象とするものを写す観点ではなく、題材という観点で捉えることにより、再現芸術としての立場を築くことができる。

臨書にはいくつかの段階的な捉え方があり、形似を目的とする写実的な臨書方法から創造性を重視した臨書方法まで考えられる。対象を正確に書き写す作業である形似への到達と原本の性質を捉えることとは別のことである。視覚的に同形になるということには、運筆における律動が関わり、視覚的な要素と感覚的な要素とが合致することに意味がある。臨書では、書の古典等を鑑賞するとともに書表現するが、対象とする書

の内容や性質の解釈、さらには広く書そのものの理解を深めることができる。鑑賞を深めながら技法を養い、技法を検討しながら鑑賞眼を向上させる。

臨書の対象とする古典には、書の歴史上普遍性を有するものが活用される。書表現の開拓を期し、表現性豊かな書作品や広く文字資料等も取り扱われる。古典の鑑賞を伴い、客観的な視点により自己の書風を形成するに有益である。書が作品として成立する方法は、臨書の考え方に通ずる。臨書は、書の古典を理解するために、追体験しながら深めることのできる手段である。表現と鑑賞とは表裏一体のものと考えられ、臨書において実現できる。

臨書作品制作において、古典を選択する際に、古典に対する感動を持つ。古典の技法を習得するために臨書行為が始まる。臨書作品は、作品という観点から考えると、創作作品と同様に、制作者が独自の制作意図と目的を持つことになる。臨書作品と創作作品との相違は、制作の動機であり、前者は書の古典美に感動を覚えそれを抛り所とし、後者は詩文などの言葉を抛り所とする。視覚的な美の感動から表現を求めていく臨書作品においては、創作作品とは異なる作品形成がなされる。また、臨書作品は、創作作品の前段階的立場に位置付けられる。古典臨書を踏まえながら創作に結実させることは正統な方法といえる。制作者が求めようとする内容によって、創作作品と同等の主張を盛り込むことも可能である。

古典の対象は、旧来から受け継がれてきた名筆劇跡、新出文字資料により、発想の基幹は古典にある。一方、近・現代の作品を対象に臨書することもあり、独自の書風を形成するには参考となる。書の創作作品は、基本的には自己の創造物と考えられるが、他者の書風を借りその手法を用いながら作品を形成するものが多く見受けられる。そして、臨書作品制作は、自らの創造性を発揮させる領域に含まれよう。

臨書作品と学書

書作品における制作方法を、近代から現代に見られる書作品の展開と経緯から述べる。創造的な臨書作品については、古来、様々な取り組みが見られる。中国、日本のおよそ近代以降には古典の風韻を備えた上で主観的な表現による臨書作品が多く示されている。それらは、学書法とも関わり、臨書する目的をそれぞれの書風の形成に役立たせている。王鐸や傅山などの臨書作品では、一見臨書だとは気付かせない、創作作品と同等の意識と方法により制作されている。そこに目指すべき臨書のあり方が存在する。彼らの場合、古典を尊重した上での創造と考えられる。また、明治期に梧竹は、古典の臨書作品を多く残した。梧竹においてはあらゆる古典を臨書する幅広さを兼ね備え、技法の錬磨を行い、古典に含まれる性情の理解に努めている。独自性を追求するための骨格を形成している。書の歴史の変遷を踏まえ、書の総体的な理解を深め、各書体での表現を実現している。

王鐸や傅山は王羲之等を受容しながら作爲的に、中林梧竹はあらゆる古典をモチーフに自己の境地を、中村不折は六朝の書を活用し現代的立場を築き、上田桑鳩は古典の書の律動を強調し、井上有一は墨跡等を対象に精神的なアプローチを試みた。その他の書人についても枚挙に暇がないが、どの書人も古典を尊重しながらも、独創を重視している。各々の創作作品も評価は高いが、臨書作品に創作同等のレベルで個性を發揮しているのである。臨書作品は、制作者による古典への感動を表現するものである。古典を選択する際に、作品を制作するという目的が意図され、古典を理解すると同時に創造する。古典を臨書して作品化する特色ある方法が様々に見られる。

このように、それぞれの時代に沿うスタイルで書の古典を作品化し、

新たな方法により、創造的な臨書作品が形成されている。自己表現に徹しており、古典を借り古典から受ける感動を書表現している。つまり、臨書作品とはいつても創作と隔たりのない創造活動といえる。臨書作品のあり方が各時代に示され、このような創造的臨書の観点にも普遍性があり、作品形成に必然性が認められる。臨書自体を特別視せず、自己表現を行っているのである。

臨書する際の古典の対象については、一つの古典を深く追求する方法と様々な古典等を多角的に取り組む方法がある。臨書では、自らが求める書の表現力を培うために、あらゆる書を対象とする。臨書作品では、制作者独自の臨書観により、特定の書を対象とする。臨書作品が臨書という行為とは異なる次元に有り、創作と基本的には同等のものとして存在する。臨書作品は、書の美を再現、構築することである。

書における模倣と創造

書風形成においては、模倣をしながら創造し、文字に美的観点を盛り込みながら展開させていく。その際の臨書という行為そのものの意義と、古典を臨書し作品化することの意義とは異なる。書作品を成立させるためには、段階的な制作に関する手順がある。書の創作における基本的な制作方法として、個性豊かな現代的書作品を制作する場合に、様々な先人の書における書風形成、表現性を比較分析していく。書作品において個々の目的はそれぞれに異なるが、共通するところは独自性ある書を書くところにある。そのためには自己の書風の確立を図ることになる。基本的な臨書のあり方としては、自己の書風形成が目的となる。

臨書作品においては、独自の観点により、古典の書美の解釈、そして、書法としての技術の向上が目指される。追体験である臨書作品においては、古典の解釈の仕方によって、同じ題材でも全く異なる世界を創出す

ることができる。古典への憧憬、感動があり、呼吸や律動を古典より再現し、独創を導き出すところに臨書作品としての意義がある。また、学書方法として、双鉤填墨の双鉤、いわゆる籠字も見られる。絵画におけるデッサンのような分析方法である。

古来、書は真似る行為から発展し続けている。学書は単純には書写することである。文字を憶える手段に近く、正確な点画の組み合わせ、文字結構、潤濁、布置、余白等、目に見える範囲で形骸を辿ることになる。さらに、書を捉えるということは、目に見えない部分を想像することでもある。例えば、筆圧、筆管の角度、遅速緩急の変化、線質等である。このことは、作者の運筆法を想像するとともに、筆意の確認を行うことである。

芸術としての臨書作品制作において、例えば明清の書法に関して、それを臨書することは技法の向上に繋がる。しかし、自己の作品として制作することを想定した場合には、明清の書家が生み出した作品形成の経緯は、様々な古典に立脚するものである。臨書対象の選定としては、基本的に原点に遡ることが必要となる。古典の完成された形のみを求めたのではなく、性質を受容するのである。書式に関しては、現代に生かされ、現代的視点による発展的な手法が必要となる。また、時代的特色、文化的背景の理解を深めることにより、その古典をモチーフに何を表現すべきかが考えられる。

ここで、漢字仮名交じりの書の学書について触れておく。漢字仮名交じりの書の歴史については、各時代を通じて、様々な方法が試みられたが、特に、近現代においてその特色に表現性豊かなものが多く残されている。つまり、漢字仮名交じりの書にも、漢字の書、仮名の書と同様に、古来より古典、古筆に該当する書が存在が認められる。そこで、漢字及び仮名の学書法と同様に、歴史的な観点から漢字仮名交じりの書がどのような存在してきたかを問うことに意義が見出だせる。本来的に日常的に

生かされる書が多く残る。

書作品における制作過程

鑑賞を目的とした書作品における内容と形態を考えていく。まずは作品を発表する場であり、目的を具現化する舞台である。基本的に場所を選ばず飾ることを想定するか、特定の場に應じた制作をするかが考えられる。後者の特化された制作では、制作における必然性が高まり、内容の明確化が期待できる。どこに展示するための作品かという作品における臨場感が関わってくる。展示場所の想定では、美術館等の白い壁面か、床の間であるかによっても作品の性質に大きな違いが出てくる。展示方法としては、壁面、机上、空間等が適当か検討される。また、書作品の形状では、書式、表装、寸法などが考えられる。作品としてのおよそのアウトラインとなるものである。形状として主なものには、軸、額、屏風、卷子、折帖、衝立、その他があげられる。

次に、書としての内容面であるが、制作者の作風の幅は、理解を深めることのできた書の範囲となる。身近な書作品、現代の書作品、それ以前の書作品等が考えられる。その範囲が広いほど、表現の幅も広がり、書の創作においては、制作の方向性が柔軟かつ明確になる。この他には、絵画などの手法を取り入れ、さらには、あらゆる事物からヒントを得た制作が考えられる。

書作品の題材とするものは、文字であり、詩文などの語句、イメージ等を書として表現する。題材選択においては、何という言葉を書きたいかということが制作の必然性となる。文字造形を創造することに伴い、言葉を伝達する要件が含まれる。そして、視覚に訴えながら言葉を生かすことでもある。

臨書作品においては、古典の選択に際して、特に、古典への感動が制

書制作における臨書と作品形成

作動機における重要な点といえる。書風を正確に把握するためには、その古典の特質を分析する。そして、どのように作品化したかという点において工夫がなされる。そこで、寸法、文字の配列、落款及び印の位置等が定まってくる。制作方法については、分析的な鑑賞、全体構想に關わる形状、書式等の検討、そして創意が加味される。

最終的に、古典における筆意が読み取られる。書の表現性において、結体や書風を決定付けている正確な用筆、運筆など確認し、律動、呼吸、遅速緩急、潤濁、骨法等が検討される。総じて、書作品における表現の主張を制作意図に問い、現代的意義を制作目的に問うことが考えられる。書作品を客観視するために必要なことは、総体的に一貫したものであるかを検討することになる。鑑賞と表現の相互の関わりともいえる。

書を含め様々な芸術分野において、発想は、多くの作品に触れるところから生じる。自由な発想で、新たなものを創造する観点が表現において不可欠である。個々人の創造力を働かせ、自らの世界を築き上げ、他者とは異なることを掘り下げて考えていく。個性を重視し、広い識見を培うために臨書が行われ、その作品制作から書風が形成される。

書の創作においては、古典から導き出されたものを工夫改良する。作品観を広範に捉えながら、その展開の方向性に目を向ける。書の創造では表現を正確に認識していくことが必要である。現代における書作品では、創造性豊かなものが求められ、芸術作品としての書のあり方が様々に試みられている。

おわりに

獨創性が認められる先人の書作品は、書の歴史に立脚し、時代性が反映され、その上で新生面が発揮されている。その表現には時代の先を見越した創造性があり、必然的な制作姿勢や学書の考え方があ

学書として、臨書では書表現の幅を広げ、古典等から規範典型を抽出し、どのように摂取習得するかによって独自性が形成される。また、臨書作品では実質的な書風形成が図られ、作品として書美を加味するところに個々の特色が現れる。これは、自己表現の立場にあり、他者の型を借りながら、独自の表現を求めることである。古典の本質を解釈し受け入れる上で、制作者の主張を必要とする。臨書作品の構造には、吸収、消化に加え、創造の展開が含まれ、臨書作品も芸術作品として評価される。

参考文献

- 平山観月『書の芸術学』、有朋堂、一九六四年。
井島勉『書の美学と書教育』、墨美社、一九七五年。
野中吟雪『書式』、『書字体系』研究編一四、書式と表装、同朋社、一九八六年。
西林昭一・杉村邦彦・浦野俊則編『歴代名家臨書集成』本巻・別巻、柳原書店、一九八八年。
佐々木盛行『中林梧竹 人と書芸術の実証的研究』、西日本文化協会、一九九一年。
中村二柄『東西美術史―交流と相反―』、岩崎美術社、一九九四年。
古谷稔編著『漢字かな交じりの書』、雄山閣出版、一九九八年。
萱のり子『書芸術の地平―その歴史と解釈―』、大阪大学出版会、二〇〇〇年。
上田桑鳩『臨書新研究』、教育図書研究会、一九五三年。